

法政大学第二中学校
二〇一五年度入学試験問題

国語 (第一回)

- 注意
- 一、受験番号・氏名は、問題用紙・解答用紙ともに記入すること。
 - 二、解答は、すべて解答用紙に記入すること。
 - 三、携帯電話など音が出るものは事前に電源を切り、試験の妨げさまたにならないようにすること。
- 万一、この注意事項を読んでいる時に電源の切り忘れに気付いたら、必ず監督者に申し出ること。

受験番号

番

氏名

一、次の各問に答えなさい。

問一 次のア～オの傍線部を漢字で正確に記しなさい。

ア、シユタイテキな行動

イ、ソツチヨクな意見

ウ、気にサワる

エ、一日センシユウ

オ、的をイタ発言

問二 次の①②の慣用句の□には体の一部を表す同じ言葉が入る。それぞれ漢字一字で答えなさい。

- ① □が出る。 □を引っぱる。 □を洗う。
② □をくくる。 □を割る。 □をさぐる。

問三 次の①～③のことわざと同じような意味を持つものはどれか。〈選択肢〉より選び、記号で答えなさい。

- ① あぶ蜂とらず ② 弘法にも筆のあやまり ③ 石の上にも三年

〈選択肢〉

- ア、かっぱの川流れ イ、二兎追う者は一兎も得ず ウ、弱り目にたたり目
エ、待てば海路の日和あり

二、次の文章を読んであとの各問に答えなさい。

二〇〇八年の夏、中央アメリカのコスタリカ共和国を訪れた。

国の広さは日本の九州と四国を合わせたほどだが、中央に活発な火山帯があり、**A** カリブ海と太平洋というふたつの海からの影響を受けて、多様な気候と生態系を有している。

コスタリカには地球上の動植物の約五パーセントが集中しているといわれ、一九七〇年代以降、森をよみがえらせるために世界でも先進的な環境保護政策がとられている。

国土の四分の一は国立公園や自然保護区であり、めずらしい虫や鳥、動物との出会いを求めて各国から人々がエコツアーに訪れる。

ぼくは東南アジアとアフリカには行ったことがあるけれども、新熱帯ネオトロピカルリッジ（※コスタリカを含む中南米の生物地理区を新熱帯区ネオトロピカルリッジという。生物地理区とは生物の分布によって八つに大別される地球上の地理区分）には行ったことがなかったので、その熱帯雨林ジャングルとはどういうものか、一度、自分の目で見てみたいと思っていた。

昔から熱帯雨林には単純なあこがれがあった。ターザンではないが、いろいろな本で読んで、へえ、すごいなあ、行ってみたいなあと思っ

ていた。最初にアフリカに行く機会に恵まれたが、アフリカ大陸全体は非常に乾燥した土地で、思ったほど暑いところではなく、ぼくの訪れた範囲では熱帯雨林らしきものを見かけなかった。

その後、東南アジアに行き、そこには確かに熱帯雨林といえるところがたくさんあった。とにかく湿っていて、木がたくさんあり、さまざまな植物と動物で満ちている。本物の熱帯雨林はそれまで本を読んで勝手につくったイメージとだいぶ違って、非常に感激だった。

B コスタリカに行ってみると、新熱帯の森林は、正直①いってずいぶん違うなあと思った。もちろんアジア、アフリカのそれとは違うと知っていたけれども。

ぼくが感じた根本的な違いは、これはいわゆる森林という格好のものではないということだ。

どこが違うかといわれると困るが、一回、人間がかなり優位になったことのある場所という印象だった。

アジアでもアフリカでも、人間が一度自然に手を入れてしまうと完全にはもとに戻らないという例を見てきた。

C アフリカに行ったときは、かつての熱帯雨林の話を知っているからすぐ期待して行くが、実際にそこで見る森はなんだか情けない感じなのだ。

人間が手を入れると、その前の自然には二度と戻らないのではないかという気がする。

人間の介入というのはそれほど大きな影響をおよぼすのだ。コスタリカではそのことがいちばん印象に残った。

別のいい方をすれば、そこで見たものは人間②というものの自覚のなさをよく表していると思った。

自然はすばらしい。普通、みなそういう印象を持っている。

しかしぼくは、人間はここまで破壊的なのかという印象を持つ。

D 地球上にはまだ人間が足を踏み入れたことのない森が残っているだろう。

が、たいていのところにはもう人間が入ってしまった。入らなくても大気汚染や温暖化はしのびよる。

仮に自分たちは自然を壊さない、伝統的なやり方で森に入っているという者がいても、刃物などを持つなら、もうそのダメージはもとに戻らないほど深いと考えるほうが適切ではないか。

自然はすごいというより、人間が③すさまじいと思う。これから我々人間はそういう自覚を持つほうがいいのではないか。

子どものころお話を聞いたような熱帯の自然はもうほとんどないかもしれないと認識することは、ぼくにとって非常に大事なことで、残念でもあり、悲しいことでもあった。

ほんとうの自然の森には道もなければ知識も、地理も、名前も、何も無いはずだ。そのような自然のままの自然、自然のままの大森林はもはやほとんどない。どこか奥地に行くところではないかと思っている人は多いと思うが、そうではないと知る必要があるだろう。

ぼくらはもはやそんな時代にはいないのだ。

④ 熱帯の自然に対するイメージは変わり、これからは、残された自然からとはどうだったのかを想像するくらいしかできないのではないか。

総合地球環境研究所のときもよくアドバイスしたのは、環境を研究するとき、そこには必ず人間が関わることになる、どこまで手をつけたかを意識したうえで自然を見なくてはいけないということだ。

ああ、これは手つかずの自然だなんて、うっかり思っではいけない。人間が入ったらもはやそこは自然ではないのだから、人間が入っていないように考へてはいけない。それを重々認識したほうがいいという話をたびたびした。

それは物理学における観察者と観察される粒子の話とよく似ている。

粒子は観察されたとたん、それまでとふるまいが変わる。人間の関わり自体が、関わる現象を変化させる。

人間というものは、大きな自然に対しても、極小の自然に対しても、結局⑤同じ問題を抱えざるをえないのかもしれない。

それと違って人間以外の動物は、自分がつかまえて食う動物に対する影響はあるだろうが、それ以外の動物や環境に対する影響はあまりない。少なくとも動物は環境を変えようとは思っていない。

その違いが人間の持つ重要な意味ではないだろうか。

ほかの動物が生きているということを、いちいち考えている動物はいない。ところが人間は考える。

動物も生きている、人間も生きている、なんて考えはじめたら、それ自体もうすでに素直なことではなく、人間中心主義になっている。

動物と同じ、人間は自然の前に無力だといえながら強烈なことをやっているということを、人間自身もうそろそろ認識したほうがいい。

自然は壊れないと気楽に思っているかもしれないが、そんな甘いものではないということを意識してみることだ。それは、人間が持っている自然観を根本的にひっくり返すような世界の見方かもしれないが。

西洋の書物を見ても「ほんとうの自然」という言葉が簡単に出てくる。

人間は自然を征服するものだと思っっている西洋の人間でさえ、壊れないところに本物の自然があると思っっている。それはお話、イリュージョン^{※1}としては成り立つかもしれないが、やっぱり気をつけていないと危ないなとぼくは感じる。

人間がいかに破壊的かという見方に立てば、簡単に「自然を守りましょう」なんていえなくなる。

原始の人間は自然の中で自然に暮らしていたといわれるが、ほんとうにそうなのか。何らかの手はつけていたのではないだろうか。

さらに近代の人間は他とは異なる存在としての人間観というものを確立した。

X と。

その意識がある以上、人間は人間以外のものと本来的に対立している。それを忘れると、きわめていいかげんなことになるのではないか。

月、火星、木星の衛星エウロパと、これからの時代、人間が利用し、関わりを持つとする環境は地球だけではなくなるだろう。

そこに行く、食う、住むなど、人間が何かしようと思えば、とたんに人間の影響がダーッとなだれ込む。

どこかの環境に手をつけない形で人間が入るなど、もし、できるといわれてもほんとうかと疑ったほうがよい。

Y

そうはつきり認識しておくほうが、よっぽど自然を守ることにつながる。守っているといえながら破壊している人間がたくさんいるのだから。

(日高敏隆「世界を、こんな風に見てごらん」より)

※1 イリュージョン……幻想。空想。

問一 空欄 A) D に入るべき言葉として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。(ただし同じ記号を二度使わないこと。)

ア、たとえば イ、さらに ウ、むろん エ、しかし オ、むしろ

問二 空欄 X ・ Y に入るべき言葉として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

〔空欄Xの選択肢〕

ア、人間は動物である

イ、人間は人間である

ウ、人間は破壊者である

エ、人間は神である

〔空欄Yの選択肢〕

ア、人間は自然を保護するものだ

イ、人間は自然を破壊するものだ

ウ、人間は自然と共存するものだ

エ、人間は自然と対立するものだ

問三 傍線部①「正直いってずいぶん違うなあと思った」とあるが、どのようなことが「違う」のか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、コスタリカの森林は、アジアやアフリカの森林と比べて、より人間の手が入っているために元の状態からかけ離れているということ。

イ、コスタリカの森林は、アフリカの森林が期待に反して情けない感じなのと比べて、人間優位で環境がよく整備されているということ。

ウ、コスタリカの森林は、アジアやアフリカの森林が人間の手で破壊されているのに比べて、先進的環境保護が行われているということ。

エ、コスタリカの森林は、アジアの熱帯雨林が感激するものである以上に、いわゆる森林というレベルを超えたすばらしさだということ。

問四 傍線部③「すさまじい」とあるが、ここでの意味を表している具体的表現を本文中から三字で抜き出さない。

問五 傍線部④「熱帯の自然に対するイメージ」とあるが、それはどのような「イメージ」か。その説明として当てはまらないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、道も知識も地理も名前も何もない場所。
- イ、人間が足を踏み入れたことのない場所。
- ウ、湿っていて、動植物に満ちている場所。
- エ、森林というものが形をなしていない場所。

問六 傍線部⑤「同じ問題」とあるが、その内容を表した一文を本文中から抜き出し、そのはじめの八字を答えなさい。(ただし、句読点やカッコなどがある場合は字数に含む。)

問七 傍線部⑥「人間が持っている自然観」とあるが、それはどのような「自然観」か。その説明として当てはまらないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、原始の人間は、自然の中で自然に暮らしていた。
- イ、自然のままの自然は、どこか奥地に行くところ。
- ウ、残された自然から元の様子を想像するしかない。
- エ、動物と同じ、人間は自然の前では無力な存在だ。

問八 傍線部②「そこで見たものは人間というものの自覚のなさをよく表している」とあるが、筆者が「そこで見たもの」とはどのようなことか。また、人間が「自覚」するべきこととはどのようなことだと筆者は述べているか。本文全体をふまえて、六十文字以上八十文字以内でわかりやすく説明しなさい。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(なお、出題の都合上、一部本文を省略した箇所がある。)

「へ、練習につきあえへん？」

心平は耳をうたぐった。

「うん、むり」

楓雅はけろりと言う。

「だってぼく、十二月にヴァイオリンのコンクールがあるからさ、いまはそっちの練習でいそがしくて」

「じゃあ、合唱コンクールはどないするねん。おまえ、ピアノ伴奏者やで」

「ほかにいないから引きうけただけ。放課後の練習までつきあうとは言っていないよ」

「はあ？」

「自由曲の伴奏くらいだったら、ぼく、練習しなくたって本番で弾けるもん」

「おまえはよくても、ほかのみんなはどないやねん。伴奏なしで練習できひんやろ」

「うん、だから考えたんだけど……」

声をとがらせる心平に、楓雅は

1

「ぼくの演奏、スマホに録音しといてあげるよ。それ使って練習すれば？」

「ハイテクか！」

間髪をいれずに蒼太のツッコミがひびくも、心平は無視して楓雅をにらんだ。

「なんやの、それ。音があったらええちゅうわけやないやろ。みんなで息を合わせるための練習やで」

心平にしてはめずらしく本気でイラついていた。

みんなから「ヴァイオリン王子」などと呼ばれている楓雅は、もともと、心平にとっては異星人みたいな相手だ。なんというか、話が通じない。ギャグが通じたこともない。

「いやなら、ぼくは降りるから。ほかのヤツに伴奏、たのんでよ」

どこまでも身勝手な王子にあきれ、心平は「ほかのヤツ」に救いを求めるように、威勢よく背後をふりむいた。

ふだんは使われていない一年D組の教室。予備のピアノが置かれているそこには、練習のはじまりを待つクラスメイトたちの顔がある。と言っても、近藤と美奈は無断でいなくなるし、吉田くんは「週一の塾だけは休めない」と帰ってしまうし、で、練習初日からして欠けている顔も多い。

「ほかにおらんの、ピアノ弾けるヤツ」

助け船を求める心平に、クラスのみんなは笹舟ささぶねみたいにくらぶ首をゆらした。

「オレ、猫ふんじゃったなら弾けるけど」

「あたしも、さくらさくらなら」

「ドレミファソラシドなら弾いたことある」

「そやなくて、伴奏できるヤツはおらんのかっ」

しーん。どうやら、いならしい。

敗北か——^① がっくり肩を落とす心平の背なかを、楓雅が気安くぼんとたたいた。

「じゃあぼく、今日もヴァイオリンのレッスンがあるから、おさきに。スマホの件、考えといて。言っとくけど、うちのクラスの自由曲、かなり伴奏むずかしいからね」

北見二中では、合唱コンクールの課題曲は音楽の時間に練習し、自由曲は各クラスが力を合わせて放課後にとりくむことになっている。が、それも伴奏者がいてこそだ。音程を示してくれるピアノの音もなしに、複雑な混声合唱曲など歌えるわけがない。

楓雅が教室を去るなり、ほかのみんなはてきめんにあきらめモードとなり、「じゃ、オレも部活あるから」「わたしも今週いそがしいから」などどつきつきに逃走。あつという間に教室はもぬけのからとなってしまうた。

「気にしないほうがいいよ。楓雅はあいうヤツだから」

唯一、心平のそばに残ってくれたのは、ヒロだ。

「いざとなったら、スマホで練習でもしようがないんじゃない」

「いや、そんな練習、聞いたことあらへん。アホみたいや」

心平は意地になっていた。スマホがいやというよりも、楓雅のやりかたが気に入らないのだ。

「いくら英才教育うけとったって、あいつには歌のハートがあらへん。あんなヤツ、伴奏者失格や。今日、おらんかったヤツのなかにもピ

アノ弾けるのがおるかもしれんし、オレがもういっぺんさがしたる」

語気のあらい心平に、「いればいいけど……」と、ヒロは

(中略)

「悪いけど、オレにとつての合唱コンクールは、大勢の前でめだてるチャンスやねん」

「へ」

「そもそも、オレが指揮者に立候補したのは、めだつただけや」

ヒロがあんぐり口を開け、「ガ〜〜ン！」とテロップをつけたような顔になる。

打てばびびくようなそのリアクションに触発されて、もう一丁、と心平は声を力ませた。

「どうせやったら、三位以内に入って、表彰式で思いっきりボケ倒したい。そのためには、なにがなんでも、伴奏者の協力が必要なんや！」

(中略)

※1 〈雪うさぎ〉の暖簾のれんをくぐったのは、部活を終えていったん家にもどり、飼い猫のタカとトシにエサをやってからだ。

「らっしやい！」

いつものように敏さんがイキのいい声でむかえ、

「と思うたら、なんや、心平か。言うて損した。撤回や」

いつものように

3

「損はないやろ、敏さん」

「スマイル一回ぶん、返してや」

「人間ちいさ！」

毎度のやりとりをしながら店内を見まわすと、今日も八割方の席がうまっている。

(中略)

「おう、心平。今日も来てるな、おまえのクラスメイト」

カウンターのすみに身を隠した心平に、早速、常連客のおっちゃんがかからんできた。

「いいなあ、ハーフかあ。オレの中学時代にはいなかったもんなあ。もしあんな子がクラスにいたら、絶対、デートに誘ってたよなあ。東京スカイツリー、いっしょにのぼっちゃったよなあ。いいなあ、クラスメイトかあ」

ほろ酔いかげんのおっちゃんに「いいなあ」を連発され、心平はやれやれと天井をあおいだ。アリスが来るとたいいていこういうことになる。(中略)

女の子のことで、人にいじられるのはいやだ、という以上に、心平自身がアリスをどういじればいいのかわからないのだ。

アリスのことは女の子っぽくてかわいいと思う。が、大阪時代からいまに至るまで、心平は女の子っぽくてかわいいタイプと仲よくなったことがない。馬が合うのはたいいてい「おもしろい女子」や「きつい女子」。自分のギャグに笑うより、するどくツッコんでくれる子のほうが、いっしょにいても気がラクだった。そう、たとえば、いつもアリスという里緒みたいな。

どうせやったら、里緒とコンビで来てくれへんかなあ。

勝手なことを考えつつ、心平はアリスに見つからないうちにと、裏メニューの肉野菜炒め定食を大急ぎでかっこんだ。が、そそくさ帰ろうと席を立った矢先、

「心平くん」

どうやら、とうに心平を見つけていたらしいアリスに呼びとめられてしまった。

「あ……よっ」

常連客の目を意識しつつ、^②心平はそこではじめて気づいたふりをした。

「来とったんか」

「うん」

「毎度おおきに」

「ううん。こちらこそ、いつもごちそうさま」

「……」

「……」

自分から話しかけてくるわりに、アリスは積極的にネタをふろうとしない。そういうところもおっくうなのだが、この日は少々ちがっていた。

「あのね、あの……あたし、応援してるから」

「え」

「合唱」

ただただしくも、アリスが自分からしゃべりだしたのだ。

「指揮者って、みんなを引っぱらなきゃいけないからたいへんだと思うけど、でも、心平くんならできると思う」

「お……ありがとう」

「あたし、合唱コンクール、楽しみにしてる。うちのクラスの自由曲、あたしも里緒も大好きなんだ。あたしたち、もうふたりで練習はじめるよ」

「ほんま?」

「うん。ときどきね、いっしょに歌ってるの。あたしがソプラノ、里緒がアルト」

きよろきよろしていた心平の瞳が止まった。一年A組の〈きれいどころ〉ふたりのデュエット。ぽうっと宙をおおぐ心平のなかで、その絵柄はどこか神々しく、男心を刺激するなにかがあった。

「なんや、やる気が出てきたわ」

そうか、ふたりはやる気なのだ。早くも練習をつんでいるのだ。自由曲が好きなのだ。

「よっしゃ、オレもやったる。浜倉、おおきにな!」

にわかにならずに、うきたった足どりで家に帰る道すがら、心平はふんふんと自由曲を口ずさんだり、指揮棒をふりまわすまねをしたりと、完全にその気になっていた。

どうしよう。時間がない。つぎの練習日は刻々とせまってくるのに、伴奏者がいなければならはじまらない。せっかく里緒とアリスが歌う気まんまんんでいるのに。

翌朝、いつもならば蒼太たちと騒いでいるホームルーム前の時間に、心平は自分の席で頭を抱えていた。

結局、楓雅のスマホ案をうけいれるしかないのか。うけいれるならいまなのか。^③いや、でも、しかし……。

「あおう」

耳もとでおっさんくさい声が出たのは、そのときだった。

ほんやり顔をあげた心平の前にいたのは、一年A組きつての老け役、ノムさんだ。

「心平くん。ちょっと、いいですか」

「はあ」

「陸くんが。心平くんに話があるそうで」

「へ」

よく見ると、ノムさんの横には陸がピタっとくっついている。まるで保護者によりそう小学生。この陸といい、イタルといい、ノムさんのそばにはいつも小柄な男子がまとわりついている。

「なに」

「あろう」

心平にうながされた陸は息をスーハーし、心の準備を整えてから、ようやくか細い声を出した。

「田町……田町さん、ピアノ弾ける」

「え」

「いまはわかんないけど、むかし、弾いてた。ぼく、聴いたことある」

「田町がピアノ？」

「上手だったよ」

「よっしゃ！」

心平はクラス中がふりかえるような大声をはりあげ、いきおいあまって起立した。直後、見えない障害物に脳天を打ちつけたかのように、ふたたびよれつと椅子へくずれた。

そう。少し頭を働かせれば、そこにも大きな障害があるのがわかる。

「田町は、でも……学校、来いひんやろ」

4

心平に、

「うん。だから」

と、陸がこっくりうなずいた。

「だから？」

「だから」

「だから？」

「だから……」

「だからよけいに田町さんがいって、陸くん、考えたみたいで」

言葉にできない陸を見かねたノムさんが代弁した。

「田町さんだって、もしかしたら学校に来るきっかけ、さがしてるかもしれないし。みんなのためにピアノを弾くって目的があったら、少しは学校に来やすくなるかもしれないじゃない？ それに、田町さんがいれば、一年A組の二十四人、そろって合唱コンクールに出られるし」

「なるほど」

陸の提案を聞いたとたん、ごうっと風が吹くように、^④心平のなかでなにかが動いた。合唱コンクールというものが、それまで考えていたものとはまるで違った威厳をおびて、なんだかひどく大切なもののように思えてきたのだ。

不登校中の田町がピアノを弾き、二十四人全員で合唱コンクールに出る。陸の考えたそれは、楓雅がスマホに吹き込んだ伴奏で練習するのは、まるで逆のことだった。自分がめだつたために指揮棒をふるのもちがう。

めだつ以上にやりがいのあるなにか。

^⑤未知なるそれをふりあおぐ思いで、心平は「よっしゃ！」とこぶしをかたくした。

「なんとしても、田町にピアノを弾かせたる。放課後、早速、田町をくどきに行くで！」

(森絵都「クラスメイツ」より)

【注】 ※1 〈雪うさぎ〉……四年前、大阪から東京に来た心平の両親が経営するうどん店の店名。

※2 暖簾……店名などを書き、店の入口に張って下げる日よけの布。「暖簾をくぐる」は、店に入ること。

※3 来いひんやろ……「来ないだろう」という意味の大阪弁。

問一 波線部A「打てばびびく」・B「おっくう」の本文中における意味として、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

A「打てばびびく」

B「おっくう」

ア、表情豊かに反応する

ア、めんどろくさい

イ、すぐさま反応がある

イ、いつものこと

ウ、期待以上に反応する

ウ、うまが合わない

エ、確実に反応してくる

エ、気楽ではない

オ、期待通りに反応する

オ、イライラする

問二 空欄 1 4 に入るべき表現として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。(ただし同じ記号は二度使わないこと。)

ア、急に声のハリを失った

イ、笑顔で言った

ウ、うかない表情だ

エ、平然と言ったのけた

オ、憎まれ口をそえた

問三 傍線部①「がっくり肩を落とす心平の背なかを、楓雅が気安くぼんとたたいた」とあるが、この時の「楓雅」の様子はどのようなものと考えられるか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、伴奏者が楓雅以外に現れないことに対して残念な様子的心平を楓雅はなぐさめようとしている。

イ、伴奏者が一向に出ない状況に途方に暮れている心平を楓雅は他人事だし関係ないと思っている。

ウ、伴奏者である楓雅は責任を感じて、指揮者をするか迷っている心平を勇気づけようとしている。

エ、伴奏者が他に出ない状況なのに意地でもスマホの件を受け入れない心平に楓雅は苛立っている。

オ、伴奏者は自分しかいないと自信満々の楓雅は心平にやはり自分が適任であると印象付けている。

問四 傍線部②「心平はそこではじめて気づいたふりをした」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、どうせなら里緒と二人で来てくれたらと思っていたので、アリスに見つからないうちに帰ろうとしたが、呼び止められたため、勝手なことを考えていたのが気まずくて、そこではじめて気づいたふりをした。

イ、アリスとどのように接したらよいか分からないので、彼女に見つからないうちに帰ろうとしたが、呼び止められてしまったため、アリスを避けたことがばれないように、そこではじめて気づいたふりをした。

ウ、心平が馬が合うのはアリスよりも里緒の方なので、アリスに見つからないうちに帰ろうとしたが、呼び止められてしまったため、アリスに対する後ろめたい気持ちから、そこではじめて気づいたふりをした。

エ、常連客にいじられるので、アリスに見つからないうちに帰ろうとしたが、呼び止められたため、アリスのことでいじられるのがいやなことを本人には知られたくなくて、そこではじめて気づいたふりをした。

オ、女の子っぽくてかわいい女子と仲よくなったことがないので、アリスに見つからないうちに帰ろうとしたが、呼び止められたため、気が重いのが彼女にばれないように、そこではじめて気づいたふりをした。

問五 傍線部③「いや、でも、しかし……」とあるが、この時の心平の心情はどのようなものであったと考えられるか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、みんなの合唱に合わせて伴奏者がピアノを弾くのではなく、録音された演奏に合わせて歌を歌うなんて、歌のハートが感じられず、「アホみたい」で、スマホを使った合唱の練習など絶対にいやだ。

イ、ほかに誰もいないからピアノ伴奏者を引き受けただけであって、「放課後の練習までつきあうとは言っていないよ」と非常識で自分勝手な理屈を当然のように言う楓雅の思い通りにはさせたくない。

ウ、「うちのクラスの自由曲、かなり伴奏むずかしいからね」と言う一方で、「ぼく、練習しなくたって本番で弾けるもん」とも言う楓雅の、自信満々で自分のことしか考えていない態度が我慢できない。

エ、みんなから「ヴァイオリン王子」などと呼ばれているが、異星人のように話が通じない相手だとは思えず、英才教育を受けてはいても、歌のハートがない楓雅のスマホ案だけは絶対に避けたい。

オ、伴奏者を引き受けておきながら練習には参加できないと言い、代わりにスマホに録音した演奏で「練習すれば？」と提案する楓雅の、「音があればいいでしょ？」と言わんばかりのやり方が許せない。

問六 次の一文が入る箇所は、本文中のどこか。直前の一文の終わりの十字を答えなさい。(ただし、句読点やかっこなどがある場合は字数に含む。)

しかし、少し考えればわかることだが、ピアノの伴奏者はまだいない。

問七 傍線部④「心平のなかでなにかが動いた」とあるが、それ以前の心平の心情として当てはまらないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、一年A組の「きれいどころ」の里緒とアリスが、合唱コンクールで歌う気まんまんなので、男心が刺激されている。
イ、合唱コンクールは大勢の前でめだてるチャンスであり、自分が指揮者に立候補した理由は、めだつただけである。
ウ、里緒とアリスがクラスの自由曲が好きで練習をつんでいると聞き、やる気が出てきて、完全にその気になっている。
エ、スマホの伴奏による練習ではなく、歌のハートを大切に、一年A組全員で力を合わせてコンクールに臨みたい。
オ、どうせだったら合唱コンクールで三位以内に入賞し、表彰式の晴れ舞台で思いっきりボケ倒して、ウケをとりたい。

問八 傍線部⑤「未知なるそれ」とあるが、その内容を具体的に表している部分を、解答欄の「こと」に続くように、本文中から三十字以上三十五字以内で抜き出し、最初の八字を答えなさい。(ただし、句読点やかっこなどがある場合は字数に含む。)

問九 傍線部⑥「ふりあおぐ思い」とあるが、心平がそのような思いになった理由を表している一文を本文中から抜き出し、最初の八字を答えなさい。(ただし、句読点やかっこなどがある場合は字数に含む。)

